

日本幼児保育史の研究

日本保育学会共同研究小委員会

二十二、文明開化と幼稚園紹介の事情

海外よりわが国に幼稚園が輸入されたのは、いうまでもなく、明治の初期である。長いあいだの鎖国のために、海外文明に接した日本

は、明治の開国にあたって、異常なほどの熱意をもって海外の新知識を吸収しはじめ、從来の社会的地盤とは無関係に、あたらしい形の文化が移植されはじめた。幼稚園もまた、このようにあたらしく移植された新文明の一つとして発生した。十一月号でとりあげられているように、日本の社会の必要性から自然に発生した幼児のための施設は、子守学校や農繁期託児所のような形で存在していたが、明治の初期にあたって幼稚園として紹介された教育施設は、これら日本在来のものとは無関係に発展した。

幼稚園が海外の新知識として輸入されるには二つの道があった。一つは、わが国の人々が西欧の書物によって、あるいは海外に赴いてあたらしい知識をもち帰り紹介したことであり、他は西欧人がわが国に来て、直接にあたらしい知識を伝授したことである。そのいず

れの場合にも、明治初期の激しい社会的変動の時期にあたって、特殊な社会事情による変容や苦心があつた。このことを関信三の幼稚園紹介からみてみよう。

二十三、関信三の幼稚園紹介

日本における最初の有力な幼稚園は、明治九年十一月に東京女子師範学校に設立されたものとされている。その間の事情については、倉橋惣三・新庄よしこ共著「日本幼稚園史」(昭和三年、フレーベル館)および「東京女子高等師範学校六十年史」(昭和九年)に詳しいが、東京女子師範学校の初代の校長小杉恒太郎がその開校準備の責にあたり、明治八年十一月開校以来、中村正直が初代の擬理に任せられた。明治九年十一月に附属幼稚園が開設されたときには、当時、本校の英語の教師であった関信三が初代の監事(園長)として迎えられた。関信三は、ただ単に初代の監事として職責を果しただけではなく、わが国における幼稚園に関する最初の書物を著して、

初期の幼稚園に影響を与えるところが大きかった。

関信三の幼稚園関係の著書としては、「幼稚園記」(四冊)が明治九年七月に、附属幼稚園の開設に先立つて、東京女子師範学校より出版され、明治十二年三月には「幼稚園法二十遊嬉」が青山堂より出版され、同じく明治十二年には「幼稚園創立法」が著述されている。前二者は翻訳であり、最後のものは自著である。これらの書物がは、単に初期の時代だけでなく、その後しばらく保育関係の書物が出版されていないので、相當に影響力をもつたものである。

このような理由で、関信三について知ることは、國家の設立した初期の幼稚園がどのような性格をもつていたかを知るのに役立つと思う。

そこで次に、関信三は何故に幼稚園に関心をもつにいたったのか、西欧で創設され発展した幼稚園のどういう面がこの最初の幼稚園紹介者に訴えたのであろうかというような点を頭において、関信三の生涯における幼稚園紹介にいたる事情を考察してみよう。

倉橋惣三・新庄よしと共著「日本幼稚園史」中 第三編 公令功績者、保育文献の項には、関信三について次のように記してある。

関信三氏 女子師範学校附属幼稚園開園と共に初代の監事に就任、わが国幼稚園の創設にあづかり、つづいてこれが基礎を固められた。当時に於ける保育の理論と実際とは實に氏の力を發揮して生み出され育て上げられたといってよい。

明治の初め洋行し、彼の國の事情に明るく當時としては稀に見る語学の達人であり、外国の児童教育についても視察して來た。而も高き識見ある人格者であったから、幼稚園創設と共に迎えられて監事となつたのである。始めは女子師範学校の英語の教官で

あつたが、後幼稚園の方が主となり本校の教授にも関係していいた。何分にも幼稚園の保育の事毎に氏の力を俟つたのであって、「幼稚園」と共に当時の保育の実際の基礎とされた「幼稚園記」は実に氏の訳になつたものである。又保育の方法、児童のあつかい方については、フレーベル保育法直伝の松野クララ女史から教へを受け、実際の指導にあづかつてはいたが、女史は日本語には不得手であつたので、一切関氏の通訳に依らねば何事もわからなかつたのである。

保育練習科でもクララ女史の保育法の講義は氏の通訳によつたし、その他女子師範学校に於いて緊要のことの起つた際は、必ず氏の力に托つたことや、人々の信望のあつたことが、その頃の人日の日記などによつて見ることが出来る。……中略……

(第三版 三三八—三三九頁)

然るに氏の伝といふようなものが、今日どこにも遺つて居ないので、如何なる来歴を持つ人であるかについて、はつきりとわかっていないことは誠に惜しい極みである。ただこの幼稚園史を綴るにあたつて断片的であるが氏に関する記録を当時の文献に見出したので、氏の著書などを併せて、漸くここに大体の輪廓を推知することが出来たのである。

愛知県人で本願寺の僧侶であったが、基督教の秘密を探るために、基督教を奉じるかの如くよそほつて教会に出入した。
「(前略) 日本基督公会(海岸教会の前身) 設立當時 (明治五年) の教会員中、安藤劉太郎、仁村守三の二名はもと本願寺派の僧侶にて、基督教の秘密を探せんがため教会に加入したもので、安藤は後、島地黙雷師に随つて洋行し、帰朝後は関信三と改名し、其後東京女子師範学校附属幼稚園の主事となつた

〈日本幼児保育史の研究〉

が、日本に幼稚園を創設するに就いて功労のあった人である。」

(横浜市史中海岸教会の沿革) とある。

晩年健康を害して、在職中、即ち明治十三年四月十二日逝去され

た。

この記事は、植村正久の思い出として、福音新報大正十一年十一月に載つたものからその一部を引用されたもののようにあるが、後に見るよう、相当の誤謬があることをここで注意しておきたい。

(引用文中点を附した部分は誤謬の部分である。)

さて、このように閔信三は別名安藤劉太郎といい、幕末明治初期の破邪僧として知られている。この安藤劉太郎については、小沢三郎が、「幕末明治耶蘇教史研究」(昭和十九年二月、亜細亞書房) のなかで、四〇頁にわたる非常に詳しい報告をしており、またその他数種の書物、記録のなかに、資料を見いだすことができたので、それらによって、閔信三の経歴をあとづけてみよう。

△閔信三の生涯△

閔信三は僧名を猶龍といい、閔信三、閔信太郎などと称した。キリスト教の教会では、安藤劉太郎という名で知られており、後年は専ら閔信三という名で通っている。

生い立ち

生年月日などについては正確なことが分らない。三河国(愛知県)一色の安休寺(東本願寺大谷派)に生れた。養父に俱舎論をきいたことがあるそうで、兄は後に因明院雲英見曜前講師となり、因明が得意だったことである。京都の東本願寺の大学に相当する高倉学寮に關係していたことがあり、そこでは猶龍という名で通っていた。

(後出 南條文雄、懐旧録、三七五頁参照)

これらの断片的な事実から察しても、若いころから学問に通じていたらしいことがわかる。

譲者としての安藤劉太郎

僧猶龍・閔信三は、熱心な仏教学徒であり、當時禁制であった邪教、耶蘇教が外國宣教師によって潜入することを憂え、護法精神に燃えて、耶蘇教の探索とその防禦に身を挺することになる。これは当時においては、一部の仏徒のあいだに一般的な風潮であった。

そこで、内外の經典に通じた閔信三は、關院嗣講(當時高倉學寮で、破邪顕正という趣意から、漢訳した耶蘇教の聖書を講じていた)の推薦によつて、東本願寺の内命により、彈正台譲者として耶蘇教探索に従事する。最初は長崎で、つぎに横浜で譲者として活躍するが、これが大体文久二年頃(一八六二年)から、明治五年(一八七二年)に至る十年間くらいのようである。(※この間、明治五年の横浜における譲者報告書が五十四通にわたる詳細なものであり、小沢三郎がそれらの資料について詳細な報告をしており、またそのなかで閔信三みずから自分のことを述べている部分もあるので、この間の閔信三の行動を明らかにしておこう。小沢三郎も、その報告のなかで、譲者報告を利用して、彼の過去を要約しており、ここでもそれらに負うことが大きい。

前に述べたように、閔信三の耶蘇教探索の譲者としての活動は幕末にさかのぼる。彼は仏教に対し、また国家に対する忠誠心から耶蘇教の潜入に慷慨するのである。

※ 小沢三郎、前掲書によれば、譲者とは、太政官所属の彈正台から派遣される秘密の探索者であり、明治二年五月に設置され、明治四年七月に刑部省と併せて司法省となる。そこで閔信三は、公任の譲者だったということである。

明治五年三月十五日差出の諜者報告書のなかで（明治五年申三月、横浜仕留、安藤劉太郎定正の差出となつてゐる）彼はみずから「抑微臣義ハ今ヨリ凡ソ十年前、洋教ノ潛入ニ注目スル處アリテ竊ニ慷慨セリ」とのべてゐる。

シ

二

明治元年、東本願寺護法掛長崎出役として長崎にゆき、聖公会の宣教師、G・エンソンについて耶蘇教探索に従事した。彼自身、この間の事情について、つぎのよう述べてゐる。

「後チ明治元辰秋 御一新ノ際ニ當テ真宗五派一致憤發メ肥前浦上村ノ異宗徒説論の一擧蒙官命度旨出願スルノ機会ニ微臣義東本願寺ノ内命ニ依リ殊ニ

官許ヲ得テ弁事伝達所ヨリ御印鑑ヲ賜り崎陽ニ赴キ耶蘇教師エム

（註・明治五年までの安藤劉太郎の経歴については、徳重浅吉教授の「維新政治宗教史研究」昭和十年、日黒書店発行が最も参考になる。
筆者も同書に教えられるところ多大である。）

明治二年秋には、長崎から大阪へ行くことになる。そこで洋学校に入學し、宣教師ベキロにしたがつて耶蘇教探索に従事するが、大阪では人心が進歩的でなく、耶蘇教も容易にひろまらず、探索の実もあがらないので、横浜にひきうつることになる。この頃までに英語が理解できるようになつてゐる。

（註・明治二巳秋故アリテ大阪へ引移リ洋学校へ入学教師ベキロに従フ然ルニ彼地ハ人氣頗ル頑固ニシテ開化ノ道モ進歩シ難ク隨テ洋教信徒ノ土民モ甚ダ寂寥ニメ臣等長ク潜居スルニ益ナキヲ察シ

明治三年秋、横浜に移り、元彈正台大忠、渡辺昇の内命で、耶蘇教宣教師のなかに出入することになる。この渡辺昇は、後に大阪府

知事となつた人である。ここで彼の活動は最もはなばなしく、後に詳細な報告書となるのである。（徳重浅吉「維新政治宗教史研究」によれば、横浜での住所は、横浜野毛大聖院下豆腐屋トナリ片山竜太郎方である。）

※ 関信三の妻は片山シヅである。

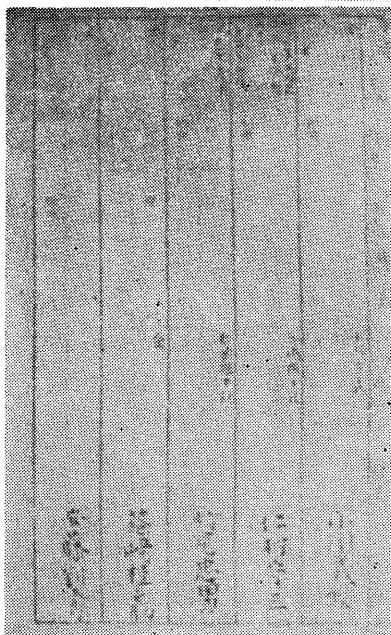
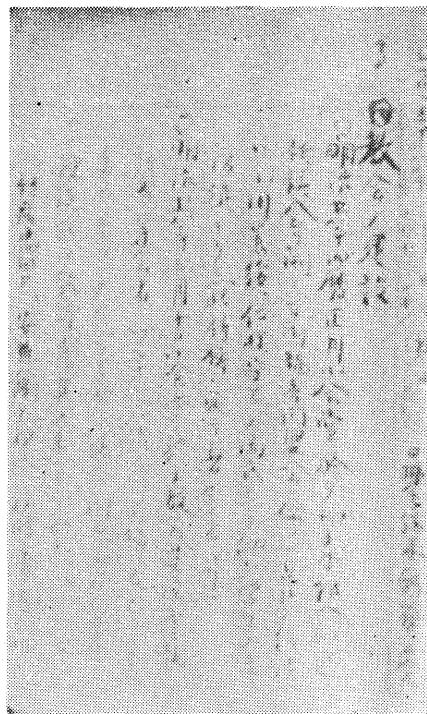
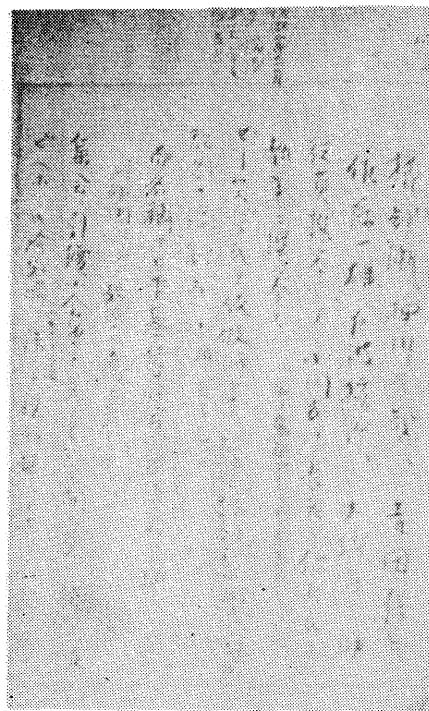
「一昨明治三年秋当港ヘ来リ爾後チ元彈正台渡辺大忠殿ノ内命ニ依リテ美國ノ教師ベロニ、ゴーブル、ボン、バラ英國ノ教師ベヤリン此他女教師キダ、プロエン等へ出没シ搜索ノ事情一々言上セシナリ」

明治四年七月、彈正台が廢止になるが、その後もひきつづいて、太政官の所属となり、諜者としての活動はつづき、「一層奮發シ」て活躍することになる。そしてその後一年間に、五十七通に及ぶ諜者報告書が記されるのである。なお、明治四年の太政官諜者任命書が遺つており、小沢三郎が指摘しているが、それによると、長崎、大阪、東京などにそれぞれ諜者が派遣されており、安藤劉太郎（関信三）は横浜諜者として任命され、上等諜者として、一日給金三十両とされている。（小沢三郎前掲書、三七八頁、早稲田大学図書館所蔵 大隈文書）

當時、横浜では、ヘボンが医師として施療所を開いて有名であり、ブラン、バラ、タムソン等の宣教師が活動していた。これらの宣教師の中に、女の宣教師が三名あった。ブライエン、クロスピー、ピヤルソンである。安藤劉太郎の諜者報告書のなかにもしばしばその名前があらわれるし、またこの章の第二節にも関係が深いので、ここでもあらかじめ注意をしておこう。

横浜における安藤劉太郎は、これらの宣教師の間に出入し、そこで知られる耶蘇教の内情とともに、そこに出入する邦人の動静につ

〈日本幼児保育史の研究〉



いても報告しつづけるが、そのうちに、明治五年二月二日、横浜海岸教会で、はじめて日本基督公会設立の際にキリスト教の洗礼を受けたもののなかの一人に加わることとなる。

横浜海岸教会に残っている記録によれば、明治五年三月十日、小会堂ニ於テ教会建設式ヲ執行ス、来会者、プラオン、バラノ両夫婦及ヒブライン夫人、ビヤソン夫人、クロスピード娘、同日九名ノ学生ニ受洗式ヲ執行ス其九名ハ左ノ如シ

竹尾忠男 安藤劉太郎 篠崎権之助 柳部漸 押川方義 吉田信義 佐藤一雄 左波捨郎 大坪庄之助
役員擧拳シテ小川氏ヲ長老ニ仁村氏ヲ執事ニ擧拳ス
而名称ヲ日本基督公会（又横浜公会）ト称ス 中略
(外國何レノ教派ニモ属セザルヲ主トス)

としてある。

また横浜海岸教会人名簿第一号にも、安藤劉太郎の名前が記載されており、除名の印が押してある。除名印が押されたのはいつか日付は明瞭でないが、ずっと後のことであることは、ほぼ確かである。

すなわち安藤劉太郎、関信三は日本における最初の基督信徒のひとりとして、基督教会史上に名をのこすこととなる。しかしながら、安藤劉太郎自身にとては、これは耶穌教探索のための方便であり、心ならずもなしたことである。その際の報告書に彼自身、次のように言っている。

「先達テ乍不本意蒙 御内許教師ハラヨリ受洗イタシ爾来晚餐祈等惣メ彼カ宗式ニ任セ一身正ニ死地ニ入り日夜彼輩ニ親炙籠在ルコトニ御座候」

すなわち、彼は不本意ながらも受洗したのであり、「彼ガ宗式ニ任セ」ることは、正に死地にいるの覚悟であったことが知られる。

こうして彼は耶穌教の内情に通じ、宣教師によつて語られるごと、その教義、儀式など逐一報告をしつづける。また、そのなかには耶穌教に近づき、そこに出入する人の名前も出てくる。

つぎにその一例として、中村敬宇（後の東京女子師範学校初代摂理）のことを述べている一節を引用しておこう。

小池詳敬・小栗憲一宛

前略 静岡県内洋学校義者昨年來亞國教師クラス在留ニテ公然學校内ニ於テ生徒ニハイブルを伝習致シ候處近來ハ幾多之信教徒モ出来致シ洋教且ニ蔓延之炎伝承任候而謙右學校ハ教授師中村敬三（敬宇のこと）管轄致シ候處同人ハ 日奉呈置候外臣某之建白ヲ認候者ニ而余程彼教之為尽力致シ候由ニ御座候 後略
(小沢三郎前掲書、史料第二号、明治五年二月十三日附)

安藤劉太郎より、三八四頁)

こうして彼の見聞したことは、たんたんとして報告されてゆく。ただしここで注意しておかなければならることは、その報告書はきわめて事実的であり、冷静な事実報告である。そのなかには激越な感情的語句はほとんどみあたらない。説教の内容などもおそれくメモをしておいたのである。忠実な記録のように報告されている。誇張や偏見によつて狂げて強調されている様子も見当らない。ここに彼の紹介者としてのすぐれた才能を見ることができるようだ。思う。そしてまた、こうして耶穌教の忠実な報告書をつくつてゆくうちに、次第に耶穌教に対する敵意がうすらぎ、好意を感じはじめてくるのではないかと想像される。

〈日本幼児保育史の研究〉

明治五年九月十三日、東本願寺現如上人が歐州に視察に行つたとき、閔信三は、その隨行として選ばれた。おそらく通訳の役をも果したのであろう。

當時、東西両本願寺は、海外視察について最も意を用いており、西本願寺は、一八七一年十一月、岩倉大使一行の欧米派遣に際して梅上沢融および島地黙雷を隨行させていた。東本願寺現如上人の渡欧は、仏教として第二回目であった。

この間の事情は、南條文雄懐旧録に詳細に載っているのでその部分を引用しておこう。

「この月十三日 新法主現如上人（諱は光宝）は藤原光宗の仮名を以つて横浜を発し、歐州見学視察の途に上られた。隨行として松本白華・石川倫弘・成島柳北・閔信三の四人が擇ばれた。」

（南條文夫・懐旧録、六二三頁）

最後の閔信三君は高倉学寮では猶龍という名であった。後の因明院雲英亮曜前講師の弟で三河国一色の安休寺に生まれた人であった。嘗て養父に俱舍論を聞いたことがあるそうで、憶念寺の養母等は、猶龍さん猶龍さんとよくこの人の話をした。この人の兄さんは因明が得意で、後年は方々に因明の講釈を押売りして寺務所の役員などを困らしたといふことである。それで院号を因明院といふ。（南條文雄・懐旧録、六二一六三頁）

以上隨行した四人のうち、翌年七月新法主と一しょに帰朝したのは松本白華一人であった。成島、石川の二人は米國へ廻つて帰朝したし、閔信三だけは英國に残つたからである。

前に倉橋惣三「幼稚園史」より引用した横浜市史によれば（それは後出の植村正久の思い出として、福音新報大正十一年によるものであろう）、閔信三は島地黙雷に隨行したように記してあるが、閔

信三は東本願寺の出であるし、また島地黙雷は西本願寺の僧であり、明治四年十一月に横浜を出発しているのだから、現如上人に随つていたとする方が正確である。

島地黙雷は、明治七年八月に帰朝し、現如上人は明治六年七月に帰朝して、南條文雄前掲書にも見られるように、閔信三はひとり残つて、明治七年の初めに帰国したことになっているから、島地黙雷に隨行したものと混同されたのであろう。

洋行中の社会事情の変化

明治初年のこの頃は、社会の変化は実に目まぐるしいものであつた。明治五年には、学制頒布、徵兵令公布と、新政府の政策が進展し、社会の急激な変化を予想されることながらが続出したが、明治六年二月には、諜者たちの効力にも拘らず、海外との与論に抗し難く、切支丹禁制高札は撤廃され、基督教徒は解放され、キリスト教は默許の形となる。そうなつたうえは、基督教探索の諜者は存在理由を失つたこととなる。小沢三郎前掲書は、この間の事情を物語る、明治六年十月の諜者総退却の資料を提出しているが、それによれば、西教迫日蔓延し、「禁允ノ論ハ全ク昔日ノ一譚ニ属シ目前彼輩ノ跋扈スルヲモ傍観スル姿ニ立至リ西教師カ虚談モ真実ニ帰シ可申付テハ積年其巢窟ニ入り肺肝ヲ擢キ尽力至居候者共ニ於テ如何相心得可仲裁ト氣ノ毒ニ存候」と、諜者の身のふり方を案じ、「何卒右取扱拂り并諜者一同速ニ職務御免被、仰付候様奉歎願候」と総退却願を出している。そしてこの中には、「漸次彼レノ懷撫ニ入り只今ニテハ西教会中届指ノ厚信家ニ算入セラレ候程ノ族モ有之内顧スレハ時勢ノ力ニ及ハサルアリ」と時勢の変化の如何ともすることのできないことを暗示している。

さて、これらのこととは、すべて閔信三洋行中の出来事である。彼

が洋行中に、以前の職は失職となり、彼が十年来情熱を傾けてきた仕事はその存在価値を失うに至るのである。社会事情は変化し、彼の内心もまた、動搖したに違いない。帰国して後、なお護法破邪の活動を続けようと思うなら、島地黙雷らのよう、その後も破邪顕正の運動をつづけて耶穌教排撃をすることもできたろう。事実その運動は明治中期までかなりの力をもって存続するのであるから。しかし彼の内心は、以前の仕事をつづけるには、あまりに動搖しているのではないかろうかと私は想像する。

南條文雄前掲書五七頁につきのようない記事がある。

破邪顕正を看板に護法場を開いた早々、この人（關彰院嗣講）は漢訳の旧約全書を講じてをられたことは前に言つたが、丁度この頃本願寺で九州の長崎へ耶穌教探偵といふ者を二人派遣したといふ話があった。一人は三河の猶龍といふ人で明治五年に現如上人が洋行の際通訳係として隨行していった関信三氏はこの人で、他是龍山慈影といふ人であった。龍山氏は後に講師になつて、死亡されたが、猶龍氏は英國に暫く留まつて帰朝の後幼稚園を開いたことがあつた。後年は基督教信者になつたようである。

（南條文雄、懷旧録、昭和二年十月三版 大雄図書房販売部、五七頁）

南條文雄は東本願寺の内情に通じた人であるから、関信三がなお、破邪顕正運動の志を抱いていたとするなら、このような記事にはならなかつたろうと思う。洋行中の関信三の資料はほとんどなく、わずかに松本白華航海録（金沢市、松任、松本白華文庫所蔵）の中に航海中の記事を見るにすぎない。以下に関信三に關係のある部分のみを抜書しておく。

明治五年、七月十八日、召以白華属之事。及就万徳寺仰明寺法回寺円重寺永順寺諸子謀。諸子皆曰、知海外事情急務也。余及舜台

隨法王、契縁慧淳接之西京、嚴成遊界援之東京、各結盟。更簡安藤劉太郎為隨行之盟。

九月十三日晴 楠兄來送十二守松翠君石川米于西村氏一飯鼓勇第七字月明即繼華之夕也乘仮國郵船吳太米利 即西曆十月十五日火曜此船馬力二百八十馬力

十四日丙申水曜大白発横濱風濤頗大白華信三臥不起困臥不起午下見富岳

二百八十馬力のフランス船に乗つて出帆したが、風波がはげしくて、白華と関信とは起き上ることができなかつたという記事である。十月朔壬申金曜西曆十一月朔 前略……関氏患腹疼叫苦甚衆狼狽乞医藥少頃愈

シンガボール附近で関は腹痛甚だしく、皆あわてたが、藥をのませて、しばらくしておさまつたという記事である。

廿一日快晴 十一字再遊香港……三字与諸君別。共石川関ニ子。至英國礼拝堂。訪教師。不在。

香港では英國の聖公会礼拝堂を訪れて いる。

廿二日 天長節遙拝故國天。六字買小艇三遊香港。八字訪英教師ペバル。蓋留香港六年也。六年間授洗礼者三十人。及示其写真。日。支那全國耶穌者六千。其尤盛行者。日寧波。日廈門。日福州。然政府惡教法。時而刑黜其教徒。談話懇々。過九字。更屬以贈英國教会之輸。歸路買便面及團扇。又過英華書院買得馬太。馬可。約翰第一書。哥林多前書。羅馬書注解。

翌日にまた英國教会を訪れ、ペバル牧師と支那の耶穌教布教の状態についてたずね、帰途書店で新約聖書を買っている。

五日金曜日晴。充吐露所志欲就仏學。關欲在倫敦講英學。巴里に来て、そこでそれどこの国で何を学ぶかを話しあ

〈日本幼稚保育史の研究〉

い、松本白華はフランスで学ぶことを欲し、閔信三はロンドンにゆき、英学を学ぶことを欲している。

十一日水曜日 与閔石川同訪寒納河南 ケーボルテヤル 十五番書

林買法華可蘭字引 和法会話 印度書目 石川買可蘭 印度歴史

ルナン基督伝 独逸訳諸体字林 閔買希臘歴史 和法会話 英訳

諸体字林

ここでは本屋でそれぞれ何を買つたかが記されている。

八日 関将游倫敦余送行墨人送至ステシヨン○黙雷来乃相共乗

馬車到大使館

閔はロンドンに発ち、松本は駅まで送つてゆく。

十一日水曜日 米国学士平文者自支那來訪我輩自言遊英五日故郷

サンフランシスコ到七月到日本安藤生余輩以不知答

米人ヘボンが来て安藤のことたずねている。松本はそれに対し

て知らないと答えている。このヘボンは日本に来た宣教師である。

ヘボンが何故安藤のことをたずねたのかわからぬ。

上の記事が閔信三洋行中の記事のほとんど全部であつて、閔が英

国で何を学び、どのような心境の変化をえたのかは明らかでない。

とにかく帰國した後には、婦人教育、幼児教育の専門家として登場

するのである。

帰朝後の閔 信三

明治七年の初めに帰朝した閔信三は、浅草の別院に関係していた

が、その後東京女子師範学校の英語教師となり、明治九年十一月に附属幼稚園開設とともに初代監事（園長）となつた。そしてわずか

三年後の明治十二年十一月四日に病死した。

東京女子師範学校が開校になつたのは、明治八年十一月であるから、開校早々に英語教師として関係することになった。帰朝後それ

までの約一年半の動静はよくわからない。

東京女子師範学校在職中の動向については、当時同校の図画の教師であった武村耕蠶女史の日記の中にその一端をみることができる。

武村耕蠶女史は工部省製作寮につとめていたが、製作寮廃止となり、東京女子師範学校に奉職することとなる。その奉職にあたつて、中村正直と閔信三の両人を訪問しているところからみても、閔信三は学校の有力者だったものと思われる。

武村耕蠶女史の日記につきのような記事がみられる。

耕蠶集 下 探花孤悰 日記 明治九年

二七頁——二八頁

三月十八日

午前第七時小石川江戸川丁拾七番地中村正直君江行く事、同氏に面会の事。同午後四時半平岡君江行く事。

三月二九日

閔信三君より使に付午後三時より出張之所、同氏留守に付帰宅の事。

三月三十日

午前八時半に下谷中御徒町三丁目二十番地閔氏へ行く事、面会仕事。

四月五日

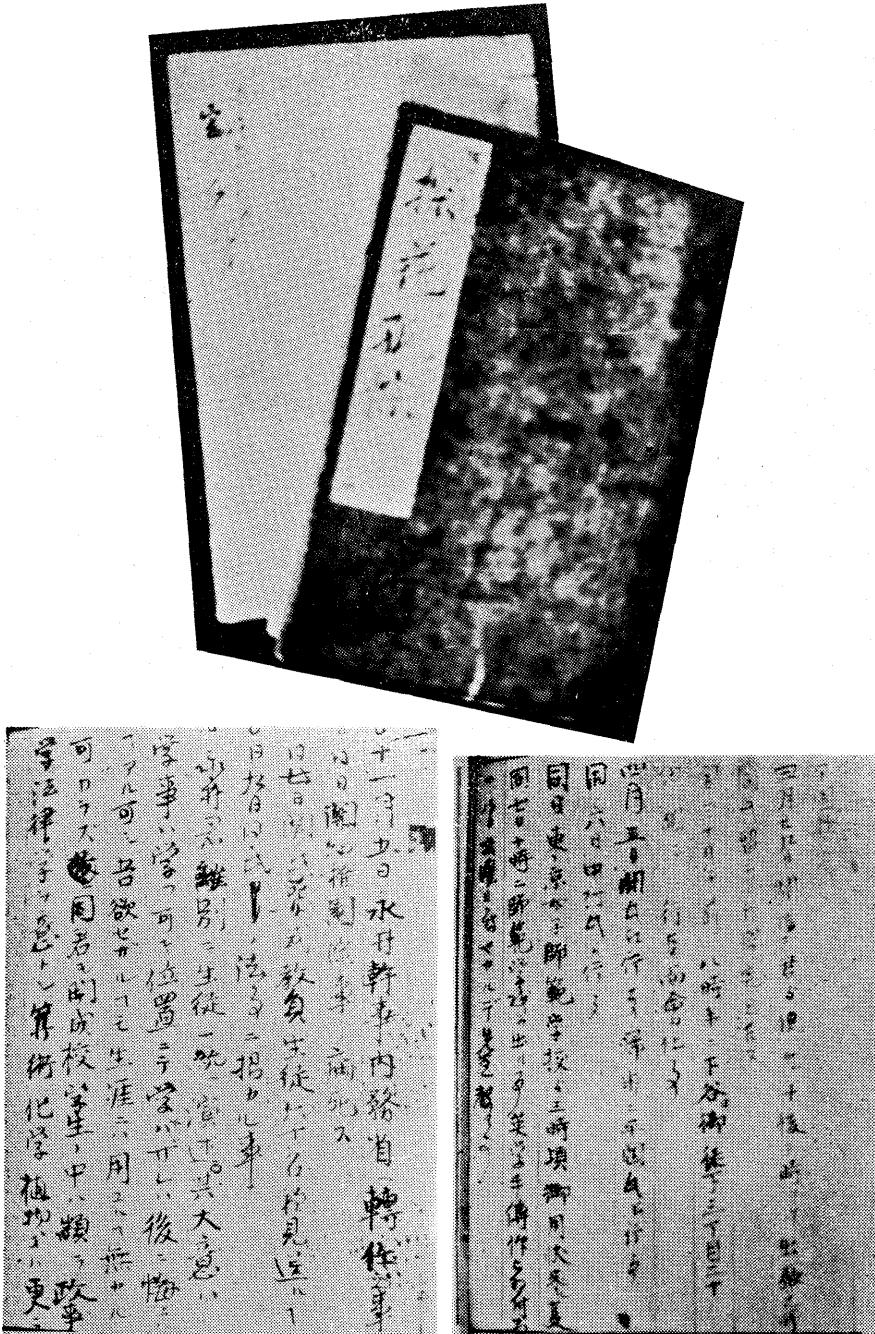
閔氏へ行く事。帰路上平岡氏へ行く事。

四月六日

中村氏へ行く事。東京女子師範学校より三時頃御用状来る事。

四月七日

十時に師範学校へ出る事 英学手伝係に抑付らること。



〈日本幼稚園保育史の研究〉

明治九年以後の関信三は、女子教育者、幼児教育者として活躍している。武村耕靄女史の日記には次のような記事を見ることができるのである。

六月二十一日

女子師範学校に於て、日本国婦人之会議初めて行はる事。始座は関氏の講義 第二ワ 柴田氏、次ワ 松本老翁 其の次ワ 津田氏 終ニ 中村先生也、諸先生方之講義之事。此日集会せる婦人之数凡百五十人余也。坪内、武村書齋の事。（耕靄集、武邑耕靄、二九頁）

武村耕靄女史

ここで武村千佐子、耕靄女史について、ちょっとふれておこう。

武村女史は、嘉永五年十一月二十五日、江戸芝口に生れ、幼いときから狩野探逸、狩野一信らについて学び、明治六年二十二才のころ横浜に出て、ブライエン、クロスピーリー、ピアソンらの塾に入り、ここで英語を学んだ。このころ英語の辞書を求めるのに、嫁入り道具として持っていた髪飾具を売ったという。いかに進歩的女性であったかがわかる。明治八年、英学および絵画の助教として工部省製作寮に勤め、明治九年に東京女子師範学校に、英学教授手伝、後に絵画教授として勤めることになる。そのころは職員の人数も少なく、幼稚園の最初の保姆である豊田芙雄女史とは特に親交があつたようであり、豊田女史が鹿児島に赴くにあたっては、詩を送っている。また後に明治二十年頃、幼稚園保育の図（倉橋惣三・新庄よしこ、日本幼稚園史に総所載、お茶の水女子大学所蔵）を画いて、幼稚園史に貢献している。大正四年に亡くなつたが、明治八年より毛筆で日誌を記しており、当時の東京女子師範学校の様子を知るのに、貴重な資料である。明治八、九年のものを、探花孤悰と題し、その後のものを窓のくれ竹と題して、数十冊におよんでいる。

この武村女史は、明治六年に、横浜海岸教会で会員となつており、後に、明治七年、東京築地の新栄教会設立の代表者の一人となつており、この点でも関信三と縁が深いので、ここにその関係を記しておいた次第である。

さて、帰朝後の関信三は、もはや諜者としての仕事を全くはなれ、新しい仕事を幼児教育、婦人教育のなかに求めていった。当時の諜者としての過去は、もちろん、一般には知られていないなかたのである。

海後宗臣が、明治文化全集、第十巻、教育編の中で「幼稚園法二十遊嬉解題」で、豊田扶雄、岩川友三郎らの談をひいているが、その間の事情を物語ついている。

関信三氏は東京女子師範学校の英語教師にして且つ幼稚園幹事となり、開設当時から園務に尽力された。それでこの頃は関信三訳の幼稚園記及び松野女史の実地保育教授に依つて幼稚園の基礎を作つたのであった。

本書の纂輯者関信三氏に就いてはその経歴を明かにすることは出来ないが愛知県の人であつて、何でも某寺院の出身とか言つて居られたとのこと。（最初の保姆にして今尚水戸に住せられる豊田芙雄女史談）東京に出てから東京外語学校に入られ、英語を学ばれたので明治七年には一級に居られたとのことで、多分明治八年より東京女子師範学校に勤められたらしい。当時一級の英語教師はワイラー氏であったが関氏と合はずして、よく関氏はワイラーより叱られて居たとのことである。（当時同級生にして、現在東京女子高等師範学校名譽教授岩川友三郎氏談）然し関氏は極めて温厚な人であり、物事に熱心であつて、初めるとなかなかよく勉められた。学校に居らる頃より女子師範学校の方に關係してお

られたらしく、卒業後は専ら幼稚園教育に力を注がれた。明治十二年に病氣の為め退職せられ、程なく物故せられたのだそうであるがその時日は詳かでない。（海後宗臣、明治文化全集第十巻、

教育篇、幼稚園法二十遊嬉解題、四四頁）

明治十一年、大阪府知事、渡辺昇が、東京女子師範学校附属幼稚園を參觀した。渡辺昇は前に記したように元彈正台大忠であり、関信三とは縁深いことを指摘しておいた。その結果、氏原銀、木村末の二人が大阪府から保姆見習として上京することになる。

（日本幼稚園史、一一七頁—一八頁）

関信三の幼稚園界に対する貢献としては、明治九年に幼稚園記を翻訳し、明治十二年に、幼稚園法二十遊嬉を翻訳、同年、幼稚園創立之法を著して、明治時代の幼稚園の基礎をきずき、その影響は大きかった。その点については、あらためて後に述べることにしよう。

晩年

関信三の晩年については、前にも引用したように、從来明らかにされていなかった。

武村耕露女史の日記、明治十二年には次のように記されている。

窓のくれ竹

明治十二年

十一月五日 永井幹事内務省へ転任之事

同日

関幼稚園監事病死ス

同 七日 関氏葬式教員生徒六十名程見送る

同 九日 同氏ノ法事ニ招カル事

また、保育実習科第一回卒業生の手記（幼児の教育第三十三巻、二号）の中に、関信三の晩年について、次のような記事を発見することができた。

関先生のことを少しく書かして頂きます。

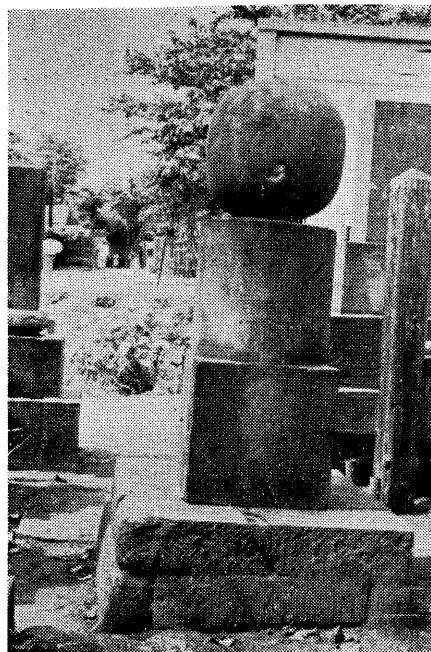
先生は人格者にて信に尊敬すべき方でありました。幼児を愛し又実習生を良く指導された、良師でありました。又幼稚園に熱誠であられました。先生の幼稚園を設立されしには非常なる困難なり事をお話ししてありました。夫は昔の事ですから当局の方でも学校の方でも幼稚園に理解有る方は無いと申してもよい位でございましたから。先生の御苦心は容易でなかつたことと存じます。

不幸にして先生は病を得られたるも押して御出勤でしたがだんだん病ひ重く成られたるも、病にもひるむことなく幼児を愛し私共にも御教訓くださいました。然るに病は進み遂に病床の人となられました。依て私共は度々御見舞致しました。何時も御悦びにて良く御話しをしてくださいました。是も僅かの間に御危篤に成られ面会謝絶の哀しき報に接しました。私共は居ても立ても居られずせめて御面会は成らずも蔭にて御伺ひ申さんと二三の者と御見舞致したら是非会ふとの事で御見に掛りましたが衰弱甚だしくお口も常の様になく實に哀しき御様子に見うけました。果せるかな翌日遂に御他界になりました。

先生は園の為め幾多の思を胸に納め、又御家庭としては御子様は少く、思へば先生は万感の思ひにてなやみに々永眠せられたる事を思へば胸が一ぱいに成り止めどもなく涙が出ておさへることができなかつたのです。この師の君に幸なき事は残念に思ひました。然し今は幼児保育に至ては世界的良師の倉橋先生が御出に成り保姆の養成に御尽しきださいますから関先生も地下に於て定めし冥福せられたることと信じます。

関先生の功績を思ひて私共心ばかりの碑を建てました。形はフレーベル先生の碑の如く、立方体円柱体圓体を組合せたものを谷中のお寺に建てました。

〈日本幼児保育史の研究〉



〈関信三に見る文明開化〉
譲者として耶蘇教に出入り、その内情を逐一報告していた安藤劉

(保育実習科第一回卒業生(明治十三年頃)小林とし
幼児の教育第三十三卷第二号六十八頁—六十九頁)
東京下谷、谷中には、日蓮宗、天台宗の寺院が二十以上もある
が、東本願寺の寺は一つしかない。宗善寺がこれである。ここに、
球と円筒と立方体とを組み合わせた墓がある。関信三、明治十二
年十一月四日とある。戒名は、松嶽院釈寛靜居士。過去帳には、
関信三、金剛寺坂上金富町四拾二番地とある。現在の文京区金富町
である。亡くなられた年命は明らかでないが、多分、四十才前後であった
ろうと推察される。

太郎(関信三)に対するキリスト教側の批判は、從来なかなか厳し
い。明治のキリスト教の指導者であった植村正久は、次のような思
い出ばなしを記している。
安藤劉太郎は本願寺の僧侶で寺から横浜に留学を命ぜられ、傍
ら基督教の探偵をも勤めて居たのかも知れない。洗礼を受けた年
の九月十三日に本願寺の法王や島地黙雷等に(通訳のためか)隨
行して外国にかけた。彼等と共に即ち外国基督教の模様を視察
し、基督教反対の書籍を夥しく持ち帰ったやうである。其の中に
ルナンの基督伝もあった。其の一節が復活新話と題し、島地縮堂
(註 黙雷の別号)の名を以て報四叢談と言ふ雑誌に掲載せられ
たことがある。基督は實に復活して居らぬ。マグダラのマリヤの
血迷ひから出た話に過ぎぬと断定して、基督教に一撃を加へんと
したのである。安藤は斯くの如き人物であったが、それでも帰朝
後は僧侶として立たなかつた。其理由はわからぬが、何んとなく
心次しく感じたものではあるまいか。兎も角彼は其の後関信三と
改名し、文部省設立の東京師範学校(今の高等師範学校)附属幼
稚園の主任者として勤務した。これは日本に於ける幼稚園の先駆
である。安藤は松野クララと共に日本幼稚園を創立するに就て功
勞のあつた人である。(佐波宣、植村正久とその時代、第一巻教文館
四四九頁)

その後、日本基督公会の設立について記されるときに、書初の受
洗者九名のなかに、安藤劉太郎、仁村守三の二名が譲者として潜行
していたものであることが附記されることが常になつてゐる。
このように、安藤劉太郎(関信三)のことはよく伝えられていないが、ここで見たように詳しくその経歴をしらべ、その事情を察してみると、ここに挙げられたような評は、必らずしも当を得ていな

いと思う。またこゝに引用した植村正久の記事は必ずしも正確でない。

前にも指摘したように、島地黙雷に隨行して洋行したといふのは、誤りであり、島地黙雷は後に反基督教の書物をかなり持帰つて、基督教排撃運動に従事したのであるけれども、安藤劉太郎が島地黙雷と行動をともにしたことを示すような証拠はない。これは植村正久氏の考え方であろう。

むしろ、こゝに私が指摘したいのは、明治維新、文明開化の時に当つて、関信三がこのよう振舞わなければならなかつた事情、また、そこから幼稚園紹介が生れるに至る事情である。はなやかな文明開化と社会的変化の裏にひそむ、個人の苦悩と、そこから生れる產物を、文明開化に伴う現象として見ることができると思う。幼稚園紹介がこのような事情のなかでなされたことを注目しなければならない。

関信三の太政官諜者としての活動は、明治五年の秋に終り、それから三年を経ないうちに、全く新たに、幼児教育者として登場するのである。そこには一方には急激な社会の変化と、それに伴う価値の変転があり、他方には個人の内部に起る変化がある。明治五年から明治七年の関信三の洋行中の一年余は、世界史の上でも稀にみる急激な社会的変化の時代である。廢藩置県がその実につきはじめ、学制が頒布され、切支丹禁制の高札が撤去になり、政治、経済、教育、宗教などあらゆる部面にわたつて、西欧風がとりいれられ、新しい社会がつくられつつあつた。それまで忠誠を誓つていたものも、数年後には価値がなくなることを多くの人が経験していたのであった。そして西欧から新式のものをもつてくれれば、在米の伝統とは無関係にとりいれられた時代でもあつた。このような社会的背景の中で始めて、関信三の幼稚園紹介もなされることができたのである。

ろう。

〔著書を通してみられる関信三の幼稚園紹介〕

関信三による幼稚園紹介を結ぶに當つて、彼の著書によつて紹介されたフレーベル主義の特色について附言しておこう。それは、日本における初期の幼稚園の特色をも示すものである。前にものべたように、関信三の著書は、初期の二、三十年間における幼稚園にきわめて大きな影響力をもつたものと推定されるので、関信三の書物は初期の幼稚園における代表的な著作とみてよいと思う。

そこにみられる著しい特長はフレーベルの恩物の技術的な面が強調され、その教育的意義や思想的背景についてはほとんど紹介されなかつたことである。

このことは、フレーベル主義幼稚園の紹介を目指した初期の書物に共通にみられる著しい特長である。関信三の翻訳による「幼稚園記」は、Dr. Adolf Douai: *The Kindergarten — A Manual for the Introduction of Froebel's System of Primary Education into Public schools; and for The use of Mothers and Private Teachers*, 1872. New York: E. Steigner

(幼稚園記は四冊より成るが、そのうち三冊が前記のルウェイ氏の書物の翻訳である。他の一冊は、エリザベス・ペイディとホラス・マン夫人の共著になる書物、Miss Elizabeth P. Peabody and Mrs. Horace Mann: *Kindergarten Guide, Schermerhorn, New York, 1869* の抄訳である。ハーデンのやうな章の選択が行なわれているのか明らかでないが、こゝに紹介されているものはやはり技術的なものにとどまっている。)

の翻訳である。これは原著そのものがほとんど全部恩物の扱いか

〈日本幼稚園史の研究〉

た、お話を材料、歌の材料、図画の材料によって占められており、したがってその翻訳でも恩物がどのような哲学的宗教的意義をもつか、またどのような教育思想に立っているものかというような点についてほんと述べられていない。「幼稚園二十遊嬉」も関信三著といつてはほんと述べられているが、その原著は明らかでない。多分 Edward Wiebe : Paradise of Childhood. Milton Bradley & Co. Springfield. Mass. 1870. ではないかと想像される。こののもそのほんと全部が恩物の具体的扱い方を示すものであり、個々の恩物とその扱い方がどのような教育的意義をもつものであるかについては、まったく記されていない。「幼稚園創立之法」では、經營、設備のことが大部分であり、ハーバードも教育思想についてはまったくふれられていない。関信三以外の著者による保育法の専門書には、明治三十年代になるまで、見るべきまとまつたものはほとんどみられない。桑田親五「幼稚園」明治九年は、最も古い書物であるが、これも恩物の技術的な紹介に終っている。中村五六、小西信八編「幼稚園摘要」明治二十六年は、保育に関する新しい書物に対する要求から作られたものであるが、これもフレーベルの生涯が簡単に紹介されており、それに恩物の説明が加えられている程度にすぎない。

当時、保母の間にひろく読まれたらししいものに、豊田扶雄女史の保育法に関する手記がある。これは書物として印刷されるにいたらなかつたが、講義としてひろく用いられたものらしい。(その全文が倉橋惣三、新庄よしこ著「日本幼稚園史」に載っている) これもまったく恩物の技術的な面のみについて記してあるもので、それがどのような哲学的、教育的意義をもつものかについてはふれていな

以上、現在残っている資料からみるならば、明治初年に幼稚園が創設されてより、二、三十年間は、幼稚園の実際に、フレーベル主義と恩物とがきわめて大きな力をもつていたにもかかわらず、恩物のもつ教育的意義や、その背後にある教育思想については、ほんとどまつたくと言つてよいくらい紹介されなかつたということができる。

〈終りに〉

日本における初期の幼稚園紹介の事情を調べようとして調査をするうちに、関信三の興味深い生涯にぶつかり、彼がいったい何故日本における幼稚園教育の最初の紹介者になつたのであろうかという問題を解こうとして、ついで深い深入りしてしまつた。そして結局、彼の幼稚園紹介の眞の動機はわからないままに終つてしまつた。彼の洋行中の資料がもう少し得られたらと思う。

しかし、いま、関信三の書きのこしたいろいろの資料を通して、彼がいかに真摯な学徒であり、忠実な紹介者であつたかを知り、頭が下るのである。幼稚園紹介の事情を研究するにあたり、この幼稚園の先駆者に深く敬意を表する次第である。

(津守)

* * * * *